Osaka University Knowledge Archive

Title	『阪大日本語研究』4号 1992.3 要旨
Author(s)	
Citation	阪大日本語研究. 1992, 4, p. 91-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11908
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

十津川流域の可能表現

渋　谷　勝　己

キーワード：可能表現，体系化，伝播，威信

標題の地域の言語調査の中から，可能表現に関する項目を取り出してグロットグラムを作成し，分析する。

この地域の可能表現の特徴は，大阪に近い北部では大阪方言の影響を強く受けているのに対して南部では古態を維持しており，またその中間では体系化という力のもとに新たな形式を生成しているとまとめることができる。

和歌山県新宮市周辺に分布する古い形式の中では，中央語でもその歴史があまり明らかではない補助動詞エルの存在が，特に注目される。

関西共通語化の現状
——大阪型待遇表現形式の伝播をめぐって——

中　井　精　一

キーワード：都市化，大阪方言，「ハル」・「ヤル」，地域共通語化

近畿地方中央部では，言語それ自体の起こす内的な変化と，通勤圏の拡大，地域社会の変質等の外的影響により周辺地域と共通した形式，すなわち大阪型待遇表現形式がひろがってきている。この形式の受容に関しては，各地域に独自に存在する言語環境に影響され，全ての地域が一様に，また，急速に進行するとは考えられず，今しばらくは一進一退を続けるが，やがては関西中央部で勢力をもつ大阪型に漸次変化し，統一されていくものと考えられる。

談話における非言語行動の一側面
——首振り動作・視線と談話との関係について——

山　田　美　樹

キーワード：首振り動作〈Fタイプ（前振り）・Bタイプ（後振り）〉，打点，始点，談話の進展，視線

本稿では，実際の対話の録画資料に基づき，首振り動作を中心に非言語行動を視覚的に記述・分析した。

首振り動作には，前振り・後振りと双方を組合わせた動作等がある。前振りは主に長短の話の切れ目に現れ，その「打点」は切れ目の直前のシラブルに来る。後振りは主に自立語の語頭のシラブルを「始点」とする。また，聞き手は話し手より頻繁に非言語行動を行うことで談話の進展に大きく関わる。

談話が停滞すると，首振り動作の頻度が落ちる他，短い発話の応酬が続いたり，発話末と発話中で話すスピードに差が無くなったりする。

視線もまた談話の進展に大きく関わっている。話し手の首振り動作に視線が加わると，80%の高率で聞き手から反応が返ってくる。

このように，日本語教育では言語・非言語両面において学習者のコミュニケーション能力の向上を図る事が大切なのである。

「Xハ」型従属節について

塩入すみ

キーワード：「Xハ」型従属節，目的節，理由節，時節，主節の制約

本稿では，現代日本語の複文における従属節のうち，形態的に「ハ」を含むもの（「タメニハ・カラニハ・トキハ」など）を，‘「Xハ」型従属節’と呼び，そのうちの「タメニハ」「カラニハ」「トキハ」について，それぞれに対応する「ハ」のない従属節（いわば「X」型）と比較しつつ，構文的・意味的特徴を記述，説明した。

その結果，それぞれの節の制約は異なるものの，節としての独立度や，主節の制約などの共通点が見られることがわかった。

『Xハ』型従属節は，節としての独立度が高く，主節には，一回の出来事を描写するような文はふさわしくない，といえる。

複文における「の(だ)」の機能
——「のではなく(て)」「のでは」と「のだから」「のだが」——

野田春美

キーワード：複文，接続助詞，スコープの「の(だ)」，ムードの「のだ」，名詞句化

「の(だ)」が接続助詞に前接した時の機能を，文末に現れるときの「の(だ)」の機能と関連づけながら考察した。

まず，「の(だ)」に接続助詞を後接した形式と，名詞に接続助詞を後接した場合とを比較した。両者が共通した性質をもつならば，その「の(だ)」は，文の一部を名詞句化するためのスコープの「の(だ)」であり，性質が異なっていれば，ムードの「のだ」であると考えられる。

その他のテストも行なった結果，今回とりあげた四つのうち，「のではなく(て)」と「のでは」における「の(だ)」は，スコープの「の(だ)」であり，「のだから」と「のだが」における「の(だ)」は，ムードの「のだ」であることを示した。